

いじりいせき S 井尻遺跡現地公開解説

1. はじめに

一般国道 170 号（十三高槻線）道路築造事業が計画・実施されるにあたり、周辺には古代の梶原瓦窯跡、中世の上牧遺跡、梶原南遺跡など多くの遺跡が存在することから、平成 25 年 4 月から 5 月の間、事前に遺跡の有無を確認するための調査を行ったところ、井尻 1 丁目近辺を中心に溝や土坑から平安時代（11 世紀頃）を中心とした土師器、瓦器などが多量に出土し、ここに遺跡が存在することが明らかになりました。

この結果、公益財団法人大阪府文化財センターは、大阪府茨木土木事務所の委託を受けて、大阪府教育委員会の指導のもと、平成 25 年 10 月から調査を行ってきました。

今回の現地公開では、主な出土遺物と写真パネルを展示し、合わせて調査中の現場をご覧頂き、調査成果をご紹介します。

2. 周辺の地形と環境

高槻市井尻は高槻市の東部に位置し、北側の北摂山地と南側を北東から南西に流れる淀川に挟まれた大阪平野の北東部にあたります。山地のある北側へ緩やかに標高は上がっていますが、調査地の周辺は標高 7 m から 8 m 程度で、ほぼ平坦といえます。

国道 171 号線沿いには工場、倉庫や住宅が点在していますが、田畑も多くみられます。また、これらの田畑を区画する畔や縫うように走る水路は蛇行するものが多いのですが、当地の平野が河川の氾濫による土砂堆積によって形成されていた様子を示すと考えられます。井尻の地名は井路（灌漑用水路）の尻（末端部）にあたることからそう呼ばれるようになったと言われますが、現在も当地近辺を縦横に走る用水路はそれを物語っています。

3. 周辺の歴史から見た井尻遺跡

今から 8000 年前頃の縄文時代前期には、この付近は淀川河口であったと考えられています。

弥生時代の遺跡としては 1 km 程西方に北摂地域を代表する安満遺跡があります。井尻遺跡の北東に隣接する上牧遺跡からも後期の遺物が出土しています。

古墳時代には北方の山地に安満山古墳群・梶原古墳群・萩之庄古墳群・磐手杜古墳群など後期の群集墳が多く築かれます。平野部では梶原寺跡・上牧遺跡から古墳時代の遺構・遺物が発見されています。

古代には山地裾に梶原寺が創建され、東大寺に瓦を供給した梶原瓦窯跡、萩之庄瓦窯跡などがみられます。この地の広域名称である「上牧」の地名からも分かるように、9 世紀末頃以降、淀川沿いには牧が置かれていたようで、室町時代の応永 4 年（14 世紀末）には「井尻牧」の名もみえます。

南の淀川河川敷に群生する「鵜殿の葦原」は古くから有名で、「鵜殿」の地名は紀貫之が 10 世紀に記した「土佐日記」にも宿泊地としてみえます。11 世紀後半には藤原兼家の子孫が鵜殿・井尻に居住し鵜殿氏と称し、開発を進めたと言われています。15 世紀頃には周辺は烏丸家の所領となったようです。

また、北東に隣接する上牧遺跡では大量の瓦器碗・皿が良好な状態で発見され、関西における瓦器碗編年の基準資料となっています。なお淀川対岸の枚方市楠葉は当時の瓦器碗の主な生産地の一つでした。

《用語説明》

土師器：古墳時代から平安時代にかけて用いられた弥生土器に続く素焼きの土器。野焼きか簡単な窯で焼成されたと考えられる。さまざまな器種があるが、主に煮炊き用・食器として用いられる。

須恵器：古墳時代中期（5 世紀）に朝鮮半島から伝えられた、ロクロを使用し製作され、トンネル状

^{あながま}の窖窯を用いて焼かれている。窯を使って焼くため、1100～1200℃という高温で焼くことができる。青白色、灰色で、硬く水もれが少ないので、杯や皿などの食器のほか、壺、甕など貯蔵具として使用されることも多い。須恵器の焼成技術は後の備前焼や丹波焼などに受け継がれていく。

^{こくしよくどき}黒色土器：奈良・平安時代、土師器の器面をへらで磨き、表面に炭素を吸着させた黒褐色の土器である。器種は椀が多いが皿や鉢などもある。椀などには内面だけを黒くいぶした製品と、両面を黒くいぶした製品がある。

^{がき}瓦器：11世紀から14、15世紀ごろまで、畿内とその周辺で製作された土器。灰色、灰黒色である。いぶし焼きをして全面に炭素を吸着させる。黒色土器の影響を受けて生産が開始されたと考えられるが、より高温で焼成されたため、胎土は瓦質になっている。主に椀製品が多いが、皿や釜などもある。

^{かいゆうとうき}灰釉陶器：植物の灰を釉薬とした焼物で 日本では8世紀から11世紀頃に作られた。中国から輸入されていた白磁を模倣しており、初めは高級品として奈良や京都の大寺院や貴族の間でつかわれていたが、平安時代の後半になると広く全国で使われるようになった。

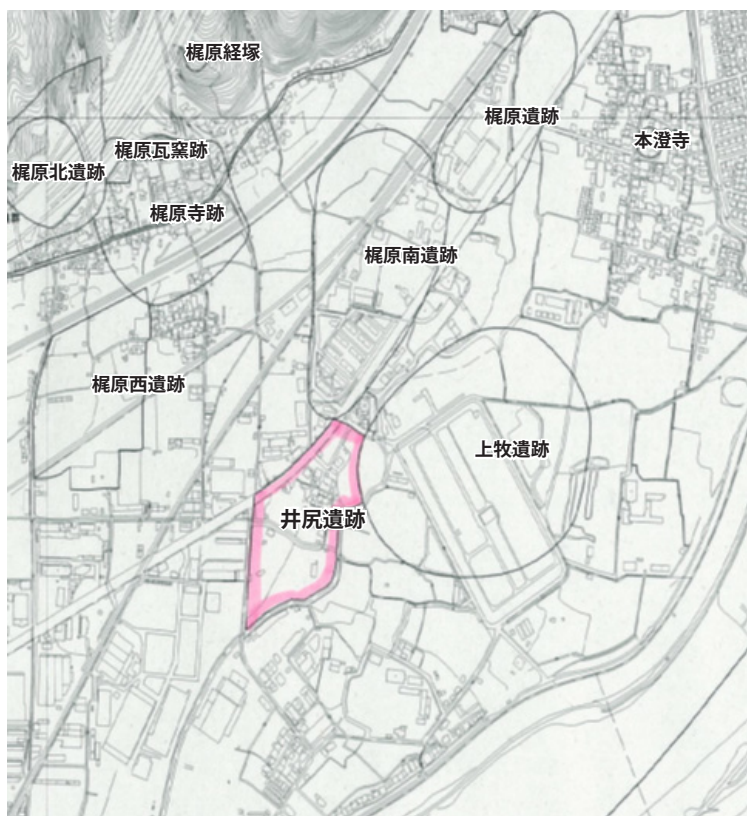
コシキ：鉢形をした蒸し器。湯釜の上にのせ、沸き立った湯気を通すために底に数個の小さい穴を開けている。コシキの中にお米などを入れて蒸す。

^{こうす}合子：ふた付きの小さい容器。香合・化粧品入れなどに用いられた。

「て」の字状口縁土師器皿

11世紀前後になると、大阪府域及びその近隣地域では、段状の受け部を持つ特徴的な土師器皿が盛行します。断面の形が「て」の字に似ていることからこう呼ばれます。今回の調査でも当時の遺構から多く出土しています。特に屋敷地と考えられる溝からは、黒色土器椀などとともに多量に出土しました。これらは屋敷地の住人が饗宴を行った後に捨てたものと考えられます。

このように素焼きの飲食器を贅沢に使い捨てる行為の跡は、京都や鎌倉など当時の都市部の上層階層の屋敷跡などでもよくみられます。



井尻遺跡の位置と周辺の遺跡

一般国道 170 号線（十三高槻線）道路築造事業に伴う
いじり

井尻遺跡 発掘調査現地公開資料

所在地：大阪府高槻市井尻

平成 26 年 5 月 10 日（土）

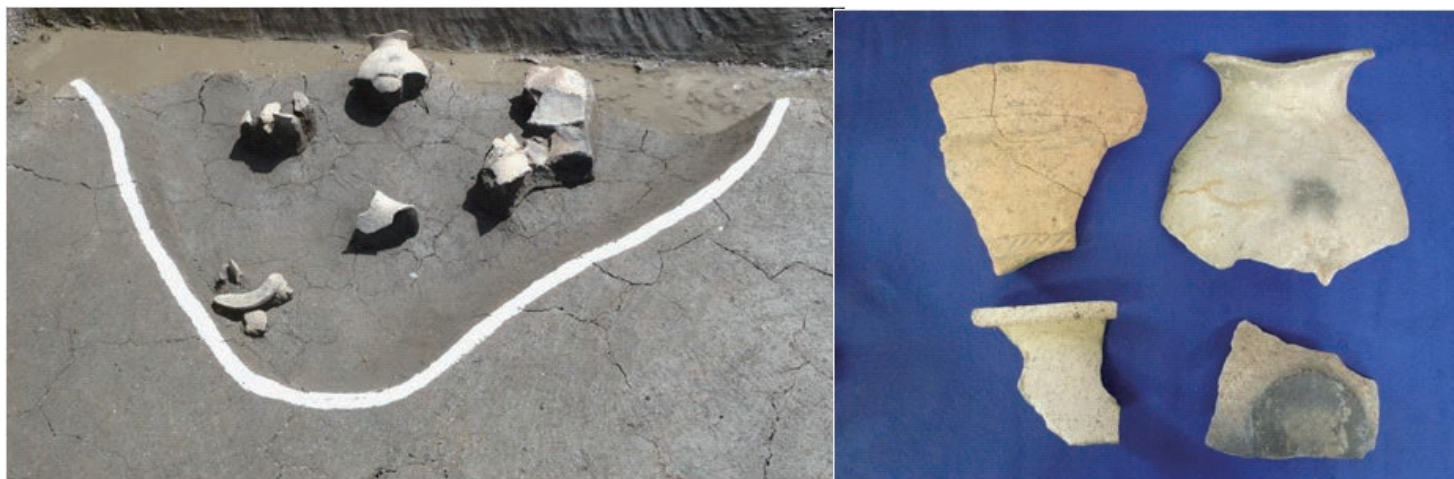
大阪府茨木土木事務所

公益財団法人 大阪府文化財センター



▲ 1. 上空から調査地を望む（写真右上が南）

§ 弥生時代中期（紀元前 1 世紀頃）



▲ 2. 弥生土器の検出状況（左）と出土した土器（右）

今回の調査でみつかった最も古い時代の土坑（穴）と弥生土器です。
土坑からは、おもに壺が出土しており、いくつかは復元できました。

§ 古墳時代前・中期（4 世紀～5 世紀頃）



▲ 3. 古墳時代の遺構面〔2 地区〕

多くの土坑や溝がみつかりました。

▲ 4. 土坑から出土した土師器甕

口縁部が上方を向いた状態で
ほぼ完全な形で出土しました。



▲ 5. 土師器や須恵器の検出状況（左）と出土した土器（右）

多くの土師器と須恵器が土坑からみつかりました。

土師器の壺やコシキ、須恵器の壺や甕、杯など多様な器種がみられます。



▲ 6. 土坑から出土した土師器壺

この壺は口縁部が途中で一度屈曲し、さらに上方へ立ち上がる特徴的な形をしていることから
「二重口縁壺」と呼ばれています。古墳時代を代表する壺です。

§ 平安時代後期（11 世紀頃）



▲ 7. 平安時代の遺構面〔5 地区〕（左）と区画溝内の遺物出土状況（右）
左側の写真↓の下に見える「コ」の字形にめぐる溝は屋敷地を区画していたと考えられます。
溝の中から土師器の皿、黒色土器の椀、瓦器の椀など、多くの土器が出土しました。



▲ 8. 黒色土器の椀（左）と瓦器の椀（右）
椀も時代によって焼成技法、器形、大きさが少しずつ変化していきます。



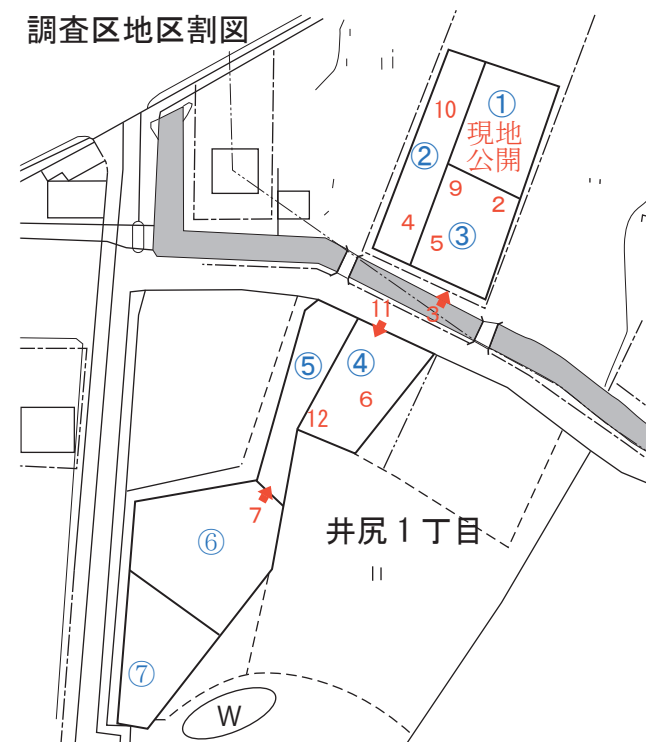
▲ 9. 小土坑から出土した灰釉陶器の皿
愛知県近辺で 10 世紀頃に生産された皿で、
底には墨書があります。



▲ 10. 土坑から出土した土師器の羽釜と皿
羽釜が伏せられた状態で出土しました。
下には平瓦が敷かれていました。
皿は添えられたように出土しています。

§ 鎌倉時代前期（13 世紀頃）

調査区地区割図



赤の数字は写真番号と対応
青丸の数字は調査区の地区番号



▲ 11. 鎌倉時代の溝群〔4 地区〕
灌漑・排水施設として築いたとみられる溝が
多数みつかっています。



中国製の青白磁合子

中国製の白磁皿



中国製の青磁碗

▲ 12. 墓と考えられる 2 基の土坑と出土遺物
平面形は左側は円形、右側は長方形です。いずれからも土師器の皿が数枚と、中国製の磁器が
出土しました。

一般国道 170 号線（十三高槻線）道路築造事業に伴う井尻遺跡 発掘調査現地公開資料

編集発行 / 公益財団法人 大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台 3 丁 21 番 4 号 Tel 072 - 299 - 8791

発行日 / 平成 26 年 5 月 10 日